

公望可臣印全集

第二十五卷



谷崎潤一郎全集 第二十五卷

定價一五〇〇圓

昭和四十三年九月十一日印刷
昭和四十三年九月二十五日發行

著者 谷崎潤一郎

發行者 山越 豐

印刷者 白井倉之助

發行所 中央公論社

東京都中央區京橋二一一
電話(五六一)五九二一
振替東京三四

新々訳源氏物語 卷一

例言

一、この書は独立した一箇の作品として味わってもらうのが本旨であって、なるべく現代人が普通の現代作品に対するように、一字一句の詮索せんさくに囚とらわれずに、安易な気持ちで読んでもらいたいのである。それゆえ、本来ならば頭注なども施したくはないのだけれども、全然省略するのも不親切であるし、実際において不便でもあるから、やはり説明があった方がいいと思われる事項には、注を加えることにした。しかしこの書を読むくらいの人なら当然知っていそうなこと、知らないでも読んでも行くうちには自然と会得えとくしそうなこと、または字引を引きさえすれば容易に分るはずのことなどは、そのままにしてあるところもある。

一、たとえば、本文の中にはしばしば古い詩の文句だの和歌の文句だのの一節を引用したり、またはそういう故人の作に基づいて和歌を詠よんだり、洒落しやれを言ったりしている

ところがある。それらは、そのもとの詩や和歌を知らないでも、「何か典拠てんきょがあるんだな」と思い及びさえすれば、大体何を言おうとしているのか察しがつくはずのことだけれども、でも知っていれば一層理解を助けもし、感興を補うことにもなるので、ごく簡単に出典を挙げあ、長い詩などはその前後の数節を、和歌はその一首の全体を記すことにした。ただし、和歌の場合に原典が明らかでないものは、「花鳥餘情所引」「河海抄所引」という風に、それを引用している注釈書の名を挙げた。

一、この物語の中で、一番読者が混雑を起しやすく、したがって、一番説明を要するものは、登場人物の呼び方であると思う。現代人が考えると不思議なことなのであるが、この大長篇の中に出て来る多くの人物のうちで、本当の名前が分っているものは極めて少い。主人公である源氏の君にしてからが、源姓みなもとであることは分っているが、源の何と言う人であったか、その正しい名はどこにも挙げてない。「光君ひかるきみ」というのは、時の人が渾名あだなをつけてそう呼んだというだけなので、もとより本名ではないのであるが、その渾名すら、この人を呼ぶのに用いられている場合はほとんどない。宇治十帖の主人公の「薰君かおるきみ」なども同様である。男子がすでにそうであるから、女子はなおさらで、「紫の上」とか「空蟬うつせみ」とか「夕顔」とかいう名は、恐らく物語の世界での渾名でさえもなく、作者が便宜上そう呼んでいるに過ぎないように察せられる。渾名で

も仮の名でも、とにかく名前らしいものがあるのはいいが、大部分の人物にはそういうものすらも与えられていない。ではいかにして人と人とを区別するかというのに、男の場合には「左大臣」^{ひだりのおとど}とか「中將の君」^{なかつうぎみ}とかいう風に官名をもって呼び、女の場合には「どこそこのおん方」という風に、その人の住んでいる御殿、場所、方角等の上に被せて呼ぶことが多い。しかしこの物語のように数十年にわたる出来事を取り扱った小説の中で、そういった一人の人物が同一の官職を占めていたり、同一の場所に住んでいたりはするはずはないので、自然この呼び方はなだ紛らわしいことになる。たとえば、「頭中將」^{とうちゆうじやう}「尚侍の君」^{なしのかん きみ}などという名で呼ばれている人はその時々によって違って来るわけで、源氏の君なども、最初のうちは「中將の君」であるが、追い追い「大將の君」^{だいしやう}になり、「大臣」になるという具合である。その上女房にも「中將の君」や「少將の君」などと呼ばれるのがあり、また「右近」^{うこん}だの「侍従の君」^{じじゆう}だのという同名異人が、同じ場面へ出て来たりする。そこで、古来の源氏の注釈家たちも、「柏木」とか「夕霧」とか「真木柱」とか「玉鬘」^{たまかざら}とかいうように、篇中の重要人物にそれぞれゆかりのある帖の名を附けて呼んでいるのは、この混雑を防ぐためであって、原作者の知ったことではないのであるが、私も頭注にはそれらの昔からの言い方を踏襲して、紛らわしい人物を指示することにした。ただし、人の名をそれと

露骨に指さないで、間接な方法で言い現わすことは、今もわれわれの一部に残っている奥床しい習慣の一つであるから、本文はどこまでも原作の言い方に従っている。

一、一度頭注を施した事項でも、読者の便宜を慮おもんばつてところどころに説明を繰り返してある。

一、和歌は、散文に訳しては講義に墮だしてしまうし、そうかといって、現代風の和歌に直すことは、私の技倆では覺束おぼつかないし、また専門家を煩わづらわしてそういう試みをしたとしても、恐らくはこの物語の世界の空氣とは調和しないものになるであろうから、原作のままを載のせることにした。それで、その和歌の解釈を頭注として書き入れてあるが、私は読者が、往々にして相当の長さになるであろうその注を読むために、そこで一々停滞しないことを望む。この物語の中の和歌は、それが挿入してある前後の文章とのつながりが非常に微妙にできているので、そのつぎ具合の面白さを味わうことが、和歌の内容を理解するのと同等に大切なのであって、この訳文では原文のように行っていないとしても、なるべくそこでつかえないですらすらと読みつづけてもらいたいのである。読者はくれぐれも、これらの和歌の価値の一半がその調子にあることを念頭に置き、時として意味が分らないことがあっても、調子の美しさが感じられさえすれば、その場は一応それでよいとして、先へ進んでもらいたい。しかし一卷を

読み終った後に、頭注の解釈を参照して、もう一度そのところを読み返して下さるならば、さらに一層感興が湧いて来るでもあろう。

一、普通、現代小説の登場人物の年齢は、何歳ということがはっきり断ってなくても、読めばおおよそ想像がつく。この物語の場合でも、原作者と同時代の人を読んだ頃には、そうであつたろうと思うが、今と昔とでは「幼年」や「老年」の言葉の内容が大変違ふので、現代小説のようなつもりで見当をつけると、考え違いをすることが多い。この原作者は、主人公の年齢を毎年書き留めてゐるわけではないが、五十餘歳で死ぬまでの生涯を述べる間には、今年何歳になつたということを記してゐる箇所もあるので、これに基づいて計算して行くと、何の巻の頃にはほぼ何歳であつたということが分る。また主人公と深い関係のあつた婦人たちの年齢なども、大概分るようになってゐるのであるが、ここでは、せめて主人公の年齢だけを、あまりうるさくない程度に、ところどころ書き入れて、読者の注意を促すようにした。

目次

桐壺

一

帚木

三

空蟬

八五

夕顏

一〇一

若紫

一五五

末摘花

二二

紅葉賀

二四九

花宴

二八三

葵

二九七

賢木

三五二

花
散
里

須
磨

明
石

潯
標

四
〇
七

四
一
五

四
六
七

五
一
五

桐
壺

桐壺

イ、皇后、中宮に次ぐ
妃

ロ、女御に次ぐ妃

何という帝みかどの御代みよのことでしたか、女御にようごや更衣こういが大勢しこう伺候しこうしていました中に、たいして重い身分ではなくて、誰だれよりも時めいている方がありました。最初から自分こそはと思ひ上あつていたおん方々は、心外なことに思おもつて蔑あやんだり嫉ねたんだりします。その人と同じくらいの身分、またはそれより低い地位の更衣こういたちは、まして気が氣ではありません。そんなことから、朝夕の宮仕えにつけても、朋輩ほうばい方の感情かんじを一途いちずに害したり、恨みを買かつたりしましたのが積り積たつたせいでしょうか、ひどく病身びやみになつて行いつて、何となく心細こそうに、ともすると里さとへ退きつて暮すようになりましたが、帝はいよいよたまらなくいとしいものに思おもひ召めして、人の非難ひなんをもお構かいにならず、世の語り草にもなりそうな扱あいをなさいます。公卿くけや殿上人てんじやうひとなども不愛想ふあいさうに顔を背そむけるという風で、まことに見る眼まなこも眩くらい御寵愛ごちゆうあいなのです。世間でも追おい追おい苦にが々にがしく思おもひ、氣きに病やみ出でして、唐土もろこしでも

イ、唐の玄宗皇帝の寵姫。玄宗がその愛におぼれたために安祿山の乱が生じた

こういうことから世が乱れ、不吉な事件が起ったものですなどと取り沙汰をし、楊貴妃の例なども引合いに出しかねないようになって行きますので、更衣はひとしお辛いことが多いのですけれども、有難いおん情の世に類もなく深いのを頼みに存じ上げながら、御殿勤めをしておられます。父の大納言は亡くなりましたけれども、母北の方が、昔氣質の人で、由緒ある家柄の生れなので、両親のある方々が現に評判もよく派手に暮しているのを見ると、娘もそれに負けないようにと、どのような儀式の折にも気をつけて上げておられました。これが、これというしっかりした後見がないのですから、何かの時にはやはり頼りないらしく、心細そうにしておられるのでした。

そのうちに、前の世からのおん契が深かったのでしょうか、またとなく清らかな、玉のような男御子さえお生れになりました。帝は早くお会いになりたくて、待ちきれなくおなりなされて、急いで呼び寄せて御覧になりますと、珍しい御器量のお児なのです。第一の御子は右大臣の女御のおん腹ですから、一般の信望が重く、疑いもない世継の君として人々も大切に存じ上げていますけれども、今度の御子のお顔だちの麗しさには、及ぶべくもないところから、第一の御子の方は一通りの表向きの御慈愛に止まって、この御子の方を御秘蔵児として限りなく御寵愛になります。母君の更衣も、もともと普通の上宮仕えをするような御身分ではないのでした。上臈として誰からも重く扱われてい

ロ、御前勤めということで、常に側近には

べって用を勤める低い身分の女官の仕事へ、主として管絃の遊びをさす

ニ、皇太子を東宮といひ、その宮務をつかさどる官を春宮坊という。春宮もトウグウとよむ

ホ、禁中の東北隅にあつて、西南にある清涼殿からは最も遠い。本名は源景舎。壺すなわち庭に桐を植えてある。桐壺から清涼殿までの間に、弘徽殿、麗景殿、宣耀殿等多くの殿舎の前を通らねばなら

ない
ヘ、渡り廊下の切れ目にかける板。随時取りはずしができるようになってゐる

ト、殿舎から殿舎へ渡る廊下。細殿ともいう

たのですが、とかく今までは、帝がむやみにお纏わりなさるあまりに、御遊の折々や、何事によらず面白いおん催しがあつたりしますと、まずその人をお召しになる、時には朝おそくまでお寝みになっていらして、その日もそのままとめて置かれるという風に、無理にお側に引き寄せてばかりいらつしやいましたので、自然軽々しく見える嫌いもありましたが、この御子がお生れになってからは、すっかり為され方をお改めになりましたので、悪くすると、この御子が春宮に立たれるかもしれないと、一の御子の女御は疑念を抱いていらつしやいます。何をいうにも、一番先に入内なされて、ほかの方々よりは大切にされておられますし、御子たちなどもいらつしやいますので、このお方のお恨みごとばかりは、帝もうるさく、面倒に思つておいでなでした。それにつけても忝ない思召しを頼みの綱にしておられる更衣は、自分のことを悪様に言い、越度を搜し出そうとする人たちが多いのに、わが身はかやく、力ない境涯なので、かえつていろいろな気苦労をされるのでした。

更衣のお局は桐壺なのです。ですから、帝がお通いになりますには、あまたの方々の局々の前をお通りにならなければなりません、それがこのようにしきりなしでは、朋輩方がいまいまいしく思うのも、まことにもっともと申さねばなりません。また更衣がお上りになりますにも、あまり度重なる折々には、打橋だの、渡殿だの、ここかしこの通

イ、汚物などを散らし
ておく

ロ、殿舎の中にある板
敷の中廊下。今の縁
側に似ている

ハ、清涼殿のうしろに
つづいた西の御殿

ニ、金銀、珠玉、宝器
などを管理し、供進
の御服、祭祀の奉幣
などをつかさどる役
所
ホ、宣陽殿にあって歴
代の御物を収めてあ
る所

ヘ、御子の母となった
女御更衣などの尊称

り道に、けしからぬものが仕掛けてあって、送り迎えをする人々の着物の裾が台なしになつて、始末に悪いことなどもあります。また或る時は、どうしても通らねばならない馬道の戸を、向うとこちとでしめし合せて閉じてしまい、まごつかせたり恥をかかせたりすることもしばしばです。そんな具合に、事に触れて数々の苦勞が増すばかりですから、ひどく気が滅入って、ふさぎ込んでいますと、それをなおさら不憫に思われて、後涼殿に前から住んでいた或る更衣の部屋を、別のところへお移しになって、そこを上局として賜まりました。追い出された人の身になってみれば、その恨みはまして言いようありません。

この御子が三つになり給うた年、御袴着のことがありましたが、第一の御子の時に劣らず、内蔵寮、納殿のものを悉く用いて、立派な式をお挙げになりました。それにつけても世間の非難が多いのですが、この御子のだんだん御成長になるお顔だちや性質などは、世に並びなく珍しいものに思われますので、そうそう嫉みようありません。ものの分った人などは、「こういうお方も世に生れていらっしゃることがあるんですね」と、あきれるまでに眼を圓くして驚いています。

その年の夏、御息所は、何となく気分がすぐれないので里へ退ろうとされましたが、どうしても暇をお遣りになりません。この頃はいつも病氣がちでおりますから、それ